
なんかようかい？

くまっ！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんかようかい？

【Nコード】

N4034I

【作者名】

くまっ！

【あらすじ】

下校途中、知人の女性に仕事を頼まれた。
俺って一体。

生命とは不思議なものである。

現時点では明確な定義付けはできず、ただ対象物が「生きている」という認識によっているあいまいなものである。

生命は光にあこがれる。

それがたとえ闇から生まれたものであつたとしても。

闇

人は闇を恐れ、畏れ。

そして毎夜闇に身をゆだねる。

今よりももっと夜の闇が濃かった頃、闇に生まれたもの達はわが世の春を謳歌していた。

人は彼らを「妖怪」と呼んだ。

夜にも人が作り出した光に溢れる今日。

彼らは一体どこへ消えたのだろうか。

夕暮れ時

朱に染まる町並みの中、二人の学生が歩いていた。

「なあ、この前くてけてけさん>が出たらしいぜ？」

「お前、この手の話がすぎだなあー」

俺にはこの手の都市伝説って奴の面白さがわからん。

こんな話どこぞの誰かが話を「作ってる」に決まってるんだ、多分。

「相変わらずな反応だな。まあ、いいや。また明日な」

おう！と別れの挨拶を交わし、俺は家路に向かおうとした。

「そっちの方向、＜三つ目娘＞が出たらしいぞ」

.....

無視！

＜三つ目娘＞

最近この町でうわさになっている都市伝説だ。

といっても、ただ三つ目の見目麗しい少女を見かけたと言うだけの噂なんだけど。

それよりも、＜てけてけさん＞の方が危ない話で、上半身だけの人間が、下半身を求めてさまよい見かけた人間の下半身を奪うため襲い掛かる。

何を言っているかわからねーと思うが、はっきり言って俺にもよくわからん。

とにかく見つけた人間すべてに襲い掛かる危ない存在なんだそうだ。

「よう！少年！」

！？

いきなり視界の外から声を掛けられた。

「何をびっくりしているのかえ？」

後ろを振り向くと見た目だけなら俺よりもかなり年下の見目麗しい女性が立っていた。

「いきなり声を掛けられたらびっくりもしますよー」

気配も感じさせずいきなり声を掛けられたら誰でも驚くと思うのだが.....

この女性は＜三上 光恵＞俺が子供の頃からの付き合いだ。

「ちょっと手伝ってほしいことがあるんだ」

三上さんは時折俺に仕事を頼んでくるのだが、結構面倒なことが多い。

とはいっても、万年金欠の一高校生としては目の前にぶら下げられ

るささやかな 餌 の誘惑に毎度負けてしまうのだ。
なんとも早、情けないことだ。

「なあに警戒してるのよっ！ここは黙っておねいさんのお手伝いを
しなさい」

「わかったよ、手伝うよー」

しぶしぶながら承諾すると三上さんは「お小遣い弾むからねっ」と
満面の笑みを俺に向けてきた。

「……一体、依頼主クライアントからいくらとるのか、そして俺に幾ら渡す
のか。

目の前の笑顔が小悪魔の笑みに見えてしょうがない。

「見て、あいつよ」

三上さんが指差す先には一人の男が立っていた。

「あいつが最近このあたりを荒らしているく腹這よ。結構危ない
奴だから気をつけてね」

「はいはいー」

「「はい」は一回でよろしい。……いくわよ」
！？

いきなりゴリ押しかよ！

もつとこう……慎重に言ってもいいんじゃないか。

俺の同様もよそに三上さんは踊りだしていく。

「ちよつと、そのアンタ！」

く腹這く疑惑の男は振り向ききよんとしている。

「アンタの悪行はすべてお見通しよっ」

「……三上さん、それじゃただの中二病だよ。

「なんのことですか？」く腹這くと言うあらぬ疑惑を勝手に掛けら
れた男は、わけもわからない感じで答える。

「しらばつくれる気？＜腹這＞アンタのことは協会からの資料に．．」

協会の言葉を聴いた瞬間、男の顔色が変わる。

と、同時に姿勢を低くし名の通り腹這となつてこちらに向かつてくる。

どう見ても普通の人間の速さではない。

瞬く間に三上さんへ向かい突進してくる。

が、三上さんはとつさに横へ跳ねこれをかわす。

「ちよつと、人の話は最後まで聞きなさいよね」

せつかくの台詞を最後まで言えなかったせいか、不機嫌そうな三上さんだが、さつきと様子が少し違う。

眉間の所に目があるのだ。

「ほら、ぼさつとしてないでさつさと確保して」

三上さんへ執拗に突進する＜腹這＞

それを闘牛士のようにいなす三上さん。

傍観者を決め込んだ俺に向かい三上さんは手伝えと言ってくる。

．．．．．

めんどくせえ

「お小遣いあげないわよっ」

やらせて頂きます。

この言葉を言われると厳しい。

目先の餌に釣られる俺．．．。

そう、俺は小銭ほしさに尻尾を振る犬なのだ。

なんて、馬鹿なことを考えているうちに、金主からまたきつい一言がくる。

「お小遣い１０％ｏｆｆ決定」

．．．．．

額も提示しなくせに、減額けつていですか．．。

これ以上、金額を下げられてはかなわない。

手伝うとしますか。

俺は、大きく息を吸い込むと、＜腹這＞へ向けて大きく吐き出す。
吐き出した息は、炎の塊となって標的へ向かい。
不幸な彼に直撃した。

「よしっ！確保完了」

所々焼け焦げたく腹這＞を縛り上げ得意げな三上さん。

「あんた、たまには協会の寄り合いに顔を出しなさいよ。最近出てないでしょ」

「わかったよ。で、約束のお金は？」

「今月の寄り合いのときに渡すから」

と、言い残し三上さんは自分よりも大きい男を担ぎ去っていった。
もちろん眉間のチャームポイントは開いたままだ。

世間一般から見たら俺達って変なんだろうな。

そんなもの達が集まって出来た互助組織が「協会」だ。

協会に入らないor協会から抜け出したハグレの者たちもいるにはいるのだが、そんなものは極少数派である。

今月の寄り合いには顔を出さなければいけなくなったなあ。

なんて事を考えながら俺は道草を終え再度家路へついた。

後日、この町の都市伝説に＜火吹き男＞が加わったのだが、正直言
って俺には興味がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4034i/>

なんかようかい？

2010年10月25日02時03分発行